ゼミにて

――ヤマトタケル系譜への疑問――

朝比奈　英夫

五月のことであったと思う。私とともにゼミに臨んでいる出席者から、ひとつの質問が寄せられた。すなわち、次のような事柄についてである。

古事記所載のヤマトタケル系譜には、明らかな矛盾がある。系譜記事に従えば、彼の曾孫にあたるカグロヒメが、ヤマトタケルの父景行天皇と婚姻関係を結ぶとされている。これは、いかなる理由によるのであろうか。

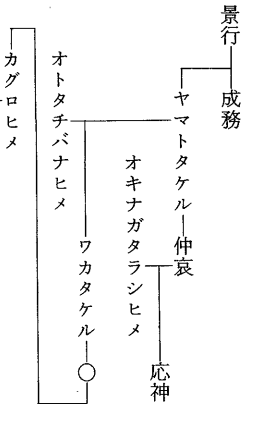
かかる指摘は、吉井巌氏の著書『ヤマトタケル』（学生社）を参考に古事記の景行天皇条を読んでいた際に生じた疑問であった。吉井氏は、その著書の中で次のように示唆されている。「どのような事情を考えても、父である人が、その子の曾孫と結婚するということはありえないことで、景行天皇とヤマトタケルとの親子の関係を切って、二人を他人と考えれば、内容上の矛盾はすべて除かれるのである。」と。したがって、私がその場での解答として出席者に伝えたのも、著書の中のこの部分であった。

しかし、もともと別々であった系譜を繋ぎ合わせた結果とみると、その際になぜ矛盾する点をそのままに残す形で新たな系譜が作られたのかという疑問が、依然として残る。事ここに至れば、私は先学の説を安易に披露した責を負わなければならない。周知のとおり、先掲『ヤマトタケル』は、同じ著者による『天皇の系譜と神話』Ⅰ・Ⅱに示される精緻な論考を基として成り立っている。それ故、つぎの手順としては、それらの論考を導きとして当面の問題に迫る必要がある。かような課題を抱えて、私は今年の夏を迎えた。

結論を先に記すと、これは私の僅かな勉強ではおよそ納得のいく解答は望めない、難しい問題であったということになる。しかし、いくつかの注釈書を手に取り、参考文献をもとめて図書館を歩いている作業は、拙いながらも私個人にとっては楽しい時間であった。加えて、古事記に興味の中心を置く友人をたびたび煩わせての雑談も、想像に傾く放談といった体を出ることはなかったものの、白状をすれば、それゆえに古代に関わる面白味を味わえる場であった。なにしろ、ことは古事記撰録のときにあって、すでに遠い記憶のな

かでその面影をとどめているにすぎないのだから。

以下、ひと夏の彷徨の跡を記し、難問を寄せたゼミの出席者に〈中間報告〉をしたいと思う。まず、必要な系図を示しておこう。



右の系図から知られるように、問題となる婚姻関係はカグロヒメと景行天皇との結びつきにとどまらない。ふたりの孫にあたるオホナカツヒメも、四世代まえの仲哀天皇と結びつくこととなっている。つまり、カグロヒメ＝景行以下の部分は、そっくりそのまま四世代下にずれ込んでいると見ることができる。

かような在り方に対して、ふたつの見解が提示されている。一つは『古事記伝』にいう「伝の紛れ」とする立場である。しかし、系譜に錯誤が起こったのであれば、その理由を問う必要があろう。よって、ここで参照すべきは、いま一つの立場、すなわち、現行の系譜以前の原系譜を想定し、そこからの改変の過程を追求する説である。

知られているように、問題の箇所は崇神王朝とそれを継ぐ王朝との結節点にあたっている。それ故、諸説の説くとおり、系譜の改変は、応神天皇を始祖とする次代の王朝の正当化を目的としていたものと思われる。改変の具体的な過程については、吉井氏の説をはじめ、それぞれの見解がある。ただし先に述べたように、その間にあっていずれの説を妥当とすべきかの判断は、私の力の及ぶところではない。そこで、諸説の一致して注目している事柄を挙げると、次の二点になる。

・かつて天皇の位置にあったヤマトタケルの皇子への格下げ。

・ヤタトタケルの後裔カゴサカ王、オシクマ王に対する、応神天皇への反逆者として位置づけ。

かような原理を踏まえてみると、そこに浮かび上がってくるのは、ヤマトタケルの存在の重みであるといえよう。系譜改変の眼目であった応神天皇は、ヤマトタケルの血統に連なりながらも、一方では、彼の後裔を否定しなければならなかった。であれば、それら後裔たちが系譜上に露わにしている矛盾もまた、血脈の上つ方に位置するヤマトタケルの重み故にもたらされた必然の帰結であったのであろうか。

もとより熟さない〈中間報告〉である。片や神々の時代から人の世に至る物語りは、さまざまな矛盾を併せ呑みながら、それを消化してしまうたしかな世界を持っているように思われる。

＊「文芸論叢」第二七号に拙稿「筑波山をめぐる道」を掲載していただいたところ、丸尾壽郎先生の御教示により、益田勝実氏の御論考「筑波にて―嬥歌再考―」（「文学」第五四巻第一二号）を知りました。末尾ながら、記して先生の御厚意に感謝申し上げます。